

『こうふ開府 500 年記念事業の 基本的考え方』

平成28年9月

甲府市

(こうふ開府500年記念事業等庁内推進本部)

— 目 次 —

1	開府500年を迎える甲府の歩み	1
2	事業の目的	3
3	基本理念	4
4	事業方針	6
5	事業期間	7

『こうふ開府500年記念事業の基本的考え方』

この基本的考え方は、「こうふ開府500年記念事業」の推進にあたり、事業の目的及び方針等を明らかにし、多様な主体が認識を共有しながら各種事業を展開できるようまとめたものである。

1 開府500年を迎える甲府の歩み

中世の甲斐の政治的・経済的な中心地は現在の笛吹市石和一帯であり、守護の武田信昌・信縄・信虎は、三代にわたり石和に近接した川田（甲府市川田町）に館を構えて領国経営を行っていた。

信虎は、群雄割拠の戦国時代に名将として全国に名を馳せた武田信玄の父であり、永正16（1519）年に躑躅ヶ崎（現武田神社）へ居館を移し、家臣をその周辺に集住させるとともに、商職人町の設定や寺社の創建、市場の開設などを進め、大規模な城下町の整備に着手した。これにより甲斐の新府中「甲府」が誕生したのである。

大永元（1521）年には信虎の嫡男として晴信（後の信玄）が誕生し、天文10（1541）年に甲斐の守護になると、信玄堤の築造や新田開発など民政に事績を残すとともに、領国の拡大を図り、戦国武将としてのゆるぎない地盤を築くこととなる。

その後、勝頼の代となり、天正10（1582）年に武田氏が滅亡すると、豊臣秀吉配下の浅野長政・幸長父子などにより、一条小山に甲府城が築城され、その周辺に近世の甲府城下町が建設された。

この城下町は徳川氏にも引き継がれ、徳川綱吉側近の柳沢吉保が城主になると、甲府城と城下町の再整備が積極的に進められた。柳沢氏の時代は、当時、甲府城下町を訪れた荻生徂徠が「人家は繁盛し、市街がよく整って商店に多くの品物が並び、人々の姿ふるまいもほとんど江戸と異なるところがない」と記すほど、江戸時代を通じて甲府城下町が最も繁栄している。

その後、享保9（1724）年の柳沢氏の大和郡山（奈良県）への所領替えにより、甲斐は幕府の直轄地となり甲府城には勤番支配が置かれることとなる。

これを機に、勤番士などから江戸の文化がもたらされ、特に亀屋座での歌舞伎興行は「甲府で流行った芝居は、江戸でも流行る」といわれるほどであった。

明治維新後、廃藩置県により甲斐国が甲斐府、甲府県、山梨県と名称をかえる中、明治6（1873）年、山梨県に着任した藤村紫朗（後の県令、現在の県

知事)は、市街地を拡充するため、甲府城の郭内の再開発に着手するとともに、市街地の拡幅や通行の妨げとなる城の堀の埋立てなどを実施し、錦町・桜町・紅梅町・常盤町などの新しいまちを整備した。通りには県庁・県病院・裁判所など、西洋風の建物が建ち並んでいた。これらの建築物は、藤村紫朗が建築を奨励したことから「藤村式建築」とも呼ばれる。

こうした中、明治22(1889)年7月1日、甲府市は、全国で34番目、関東では横浜、水戸、東京に次ぐ4番目となる市制を施行した。初代庁舎は、藤村式建築の旧梁木(やなぎ)学校校舎を転用したものである。

明治36(1903)年、鉄道(中央線)の敷設と甲府駐車場の設置により、甲府城を中心とする市街地は南北に分断されることとなったが、甲府市は以前にも増して山梨県の政治・経済の中心として発展することとなり、生糸や水晶の輸出・仲卸により成功をおさめた甲州財閥の巨頭・若尾逸平(初代甲府市長)などの人材も輩出している。

大正時代には、甲府市遊亀公園附属動物園が開園し、子どもからお年寄りまで幅広い世代が、集い、憩える場所が整備された。

その後も、昭和12(1937)年に相川村、里垣村、貢川村、国母村の4つの村と、また、昭和17(1922)年には千塚村、大宮村の2つの村と合併して市域を広げ、都市基盤の充実を図りながら更なる発展を遂げてきた。御崎町(現在の朝日5丁目ほか)に居を構えていた太宰治は、その著書『新樹の言葉』に「シルクハットを倒(さか)さまにして、その帽子の底に、小さい小さい旗を立てた、それが甲府だと思えば、間違いない。きれいに文化の、しみとおっているまちである。」と記しており、豊かな自然の中に、西洋風のしゃれた文化が根付いていたことをうかがうことができる。

太平洋戦争の終戦を迎える昭和20(1945)年7月には、甲府空襲により市域の74%が焦土と化し、甲府の古き良き時代の面影や多くの人命が奪われることとなった。しかし、終戦直後には戦災復興局が設置され、市民一丸となって、槌音高く郷土の復興に立ち上がり、平和通りや駅前広場の建設など、近代都市としての基盤整備が続けられた。

昭和24(1949)年には池田村、住吉村畔地域と、昭和29(1954)年には山城村、住吉村、朝井村、二川村、大鎌田村、甲運村、玉諸村、千代田村、能泉村、宮本村の10の村との合併が行われ、甲府市の人口は142,807人に達している。

高度経済成長期の昭和46(1971)年には、中央線の複線化や甲府バイパスの開通、昭和57(1982)年には、中央自動車道の全線開通など、モータリゼーション社会の到来に対応した国家プロジェクトとしての交通網整備が急速に進められる中、甲府市は先端技術産業が立地する工業団地建設をはじめとする産業経済の活性化などにも積極的に取り組み、地方の中核都市として発展

を遂げ、平成元（1989）年には市制施行100周年を迎えた。

また、平成12（2000）年には、地方分権の流れに対応し、自主自立した行政運営とより主体的なまちづくりを推進するため、特例市に移行し、平成18（2006）年には、中道町と上九一色村北部地域と合併するなど、時代の潮流や地方自治体を取り巻く社会環境の変化に対応した行政運営に努めてきたところである。

甲府市は、中核市への移行を予定する平成31（2019）年に記念すべき開府500年という歴史的な節目の年を迎える。

2 事業の目的

今日、我が国は、かつて経験したことのない人口減少社会に足を踏み入れており、特に地方においては、予想をはるかに超える少子高齢化と東京圏への人口流出が地方経済を縮小させ、それがまた人口減少を加速させる要因となっていることなどが指摘されている。

こうした状況を克服していくためには、それぞれの個性あふれる地方が、その多様性の中から新たな価値を生み出すことによって地方を創生していくことが重要である。

本市を取り巻く環境においても、急速な少子高齢化等により人口減少が進行する中、本市の人口は平成28（2016）年7月現在191,801人にまで減少している。また、今後の人口の将来推計にあつては、国立社会保障・人口問題研究所が、平成52（2040）年には163,952人まで減少するとしている。

一方、大きな課題も山積しており、前述の少子高齢化への対応のほか、都市インフラの老朽化、中核市への移行、リニア中央新幹線新駅開業など、将来を見据えて適切に対応していかなければならない。

このような大きな時代の変化に直面する今こそ、本市自らが自主性・自立性を十分に発揮し、新たな発想のもと創意工夫を凝らし、多様な主体との連携を図る中で、本市の持つ豊かな自然と重層的な歴史・文化などに育まれた“甲府らしさ”を活かした魅力と賑わいのあるまちづくりに積極的・戦略的に取り組むことが必要である。

本市は、来る平成31（2019）年に開府500年を迎える。甲府のこれまでの歴史を振り返ると、甲府の強みとは、挑戦し続ける精神、つまり「チャレンジ・スピリット」であり、先人たちは、その精神で課題に挑戦し、困難をチャンスに変え、危機を成長に繋げることで、多彩な魅力が輝く甲府を築いてきた。

また、開府から現在に至るまでのいずれの時点においても、甲府市に住み・働き、縁（えにし）を持っていただいた全ての人々の心の中にはかけがえのない“思い出”があり、また同時に、このまちに“期待するもの”も普遍的に存在し、そ

れらは消えることなく存在し続ける貴重なものである。

開府 500 年という節目の年を迎えるにあたり、こうした先人たちの価値ある有形・無形の財産を継承するとともに、これらの想いの蓄積を甲府市の持つ力の源泉（想いのエネルギー）とすることを基軸としていくこととし、これまでの歴史を知ることによって甲府の魅力を“再発見”し、また、それによって甲府への愛着を深め、誇りをもち、そして未来に向けて新たな時代を創りだすための行動を起こす契機としなければならない。

こうしたことから、「こうふ開府500年記念事業」の目的を次のとおりとする。

- 1 重層的で多様な歴史・伝統・文化等を再認識し、将来に向けてそれらを継承する。
- 2 国内外に効果的かつ戦略的なプロモーションを行い“甲府”の知名度の向上を図るとともに、歴史・文化・産業・自然など、甲府市の魅力に繋がる地域資源を掘り起こし、産業振興と観光振興の促進による交流人口の増加を図る。
- 3 “甲府”のポテンシャルを最大限に引き出し、安全安心で暮らしやすく、将来に向かって夢と希望がもてるまちづくりを推進することで移住定住の促進を図るとともに、甲府圏域の付加価値を高めるため、広域的な連携を視野に入れながら県都“甲府市”としての役割を果たしていく。

3 基本理念

今日の繁栄は、この地においてまちづくりがはじめられてから 500 年もの間、先人たちの弛まぬ努力によりこの“まち”が脈々と受け継がれ、守られてきた結果であり、ここに住まう人々がこの“まち”に愛着と誇りをもって暮らしてきた証でもある。

したがって、現在（いま）を生きる我々は、これまで継承してきた重層的で多様な歴史や文化を知り、そこから学び、そのうえで新たな歴史や文化を築いていかなければならないという責任を負うものである。

また、開府 500 年という記念すべき年を、今日の繁栄を築き上げてきた先人諸賢への感謝の気持ちを込めて市民総出で祝い、喜びを共有することで更にふるさと“甲府”への愛着を深めるとともに、現在（いま）を見つめ、このまちに今、何が足りないのか、これから何が必要なのか、を考える機会としつつ、我々が受け継いだこの“まち”を、より住みよいまち、より活力のあるまちにして次の世代へ引き継いでいく必要がある。

先人たちは、いつの時代も常によりよいまちづくりを目指して発展の歩みを進めてきたはずであり、開府 500 年を機に、我々はその崇高なる志を受け継ぎ、来るべき激動の時代にも自主自立の行政運営を行い、地域を牽引し得る力強い“まち”として、また、これまでそうであったように山梨県の政治・経済・文化の中心たる県都“甲府”として、これからの 100 年へ向けた未来のまちづくりに取り組んでいく決意をするものである。

こうした点を踏まえ、現在（いま）を生きる我々が何をすべきか、という視点及び我々が「歴史物語都市こうふ」の新たな歴史を築いていくという思いから、次の 3 つの柱を、「こうふ開府 500 年記念事業」の基本理念とする。

1 過去に学ぶ（歴史・文化等の継承）

500 年という長い歳月を歩んできた“甲府”というまちには、様々な歴史、多彩な伝統・文化、豊かな自然があり、そして、その歴史を創り、伝統・文化を伝え、自然を守ってきた人々がいる。

こうした本市に関わる重層的で多様な歴史、伝統・文化、人物などのかけがえのない財産について、多くの方々があらためて知り、学ぶことができる機会を創出し、それを子どもたちに自信と誇りをもって引き継ぎ、この魅力あふれるまちを継承していかなければならない。

甲府が誕生してから今日までの時の流れ、人のいとなみや、ゆかりのある人物など、“甲府”の魅力を学び、知り、再発見し、歴史・文化の継承に繋がる様々な事業を構築し展開していく。

2 ^{いま}現在を見つめる（賑わいと魅力の創出）

“まち”の元気・活気はそこに住む人々が創り出すものである。先人たちの弛まぬ努力により今日の甲府市があることに感謝の気持ちを込めて、開府 500 年という歴史的節目の年を皆で共に祝い、その喜びと感動を共有す

ることで“甲府”への愛着を更に深めるとともに、賑わいと更なる甲府の魅力を創出する。

また、現在ある課題にも目を向け、これからのまちづくりを考える機会としていく。

賑わいの創出や地域経済の活性化を図るため、効果的かつ戦略的なプロモーション活動を展開し、官民一体となって開府500年に因んだまつりやイベントなど多様な主体による様々な事業を構築し展開していく。

3 未来につなぐ（新たな甲府の創造）

過去に学び、現在を見つめなおす意義は、未来に向けたまちづくりに繋げることにある。このまちの歴史や伝統・文化等を学び、まつりやイベントを通じて醸成した“甲府”への愛着や地域の一体感を、市民と行政との協働による“甲府らしさ”を活かしたまちづくりに繋げるとともに、甲府圏域の中心都市として圏域全体の発展に貢献できるよう、新たな未来への第一歩を踏み出す。

憩いと安らぎの空間の創出など新たなまちづくりへ繋げるとともに、子どもたちの積極的参加を促す取組など、創意と工夫に満ちた様々な事業を構築し展開していく。

4 事業方針

テーマ 『甲府をつくり、甲府を愛した500年のいとなみ』

※着眼点 『50年・100年後の、甲府のまちに、人々に、何を残し、どのようなメッセージを伝えようとするのか。』

こうふ開府500年を、「次なる100年」に向けての新たな飛躍へのスタートとして捉える。

甲府のもつ重層的で多様な歴史・伝統・文化を再認識するとともに、500年にわたり「甲斐の府中」のまちづくりに携わってきた先達への感謝の心を祝意をもって表し、甲府愛の醸成と未来に向かって夢と希望にあふれ新たな甲府市の創造に繋がる「こうふ開府500年記念事業」を実施し、国内外に甲府の魅力を発信する。

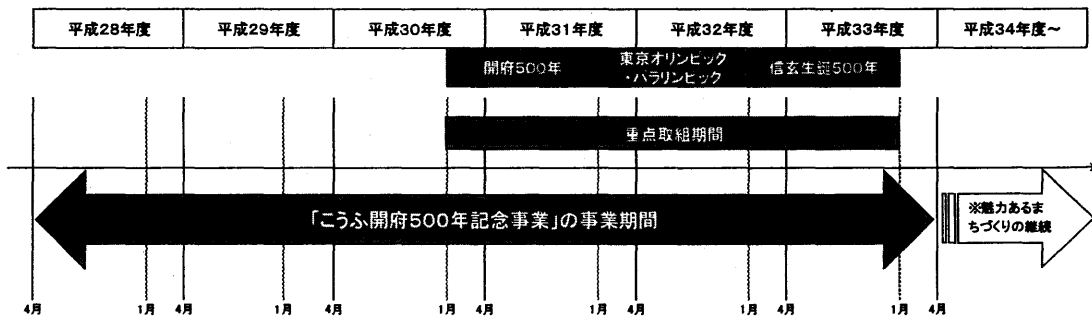
5 事業期間

平成31(2019)年には「こうふ開府500年」、平成32(2020)年には東京オリンピック・パラリンピック、続く平成33(2021)年には武田信玄公の生誕500年を迎える。

こうした郷土に関わる歴史的な節目の年や世界的なスポーツの祭典を迎えるにあたり、この機を好機と捉え、戦略的に、様々な事業を展開することで本市にとって更なる発展の礎を築く機会とするとともに、ふるさと“甲府”への愛着や郷土愛を育み、未来に向けたまちづくりに繋げていくまたとない機会でもある。

こうしたことから、組織体制の整備や事前の効果的なプロモーションの展開、更に信玄公の生誕500年事業との関連性などを考慮し、事業期間を平成28年度から平成33年度までの6年間とし、特に、平成31年から平成33年までの3年間は重点取組期間とする。

また、未来のまちづくりに繋げていくという「こうふ開府500年記念事業」の基本理念に鑑み、事業期間終了後も事業の成果を活かしながら魅力あるまちづくり、住みよいまちづくりに、不断に取り組むものとする。



(担当 甲府市企画部企画総室開府500年事業計画課)